
真剣で浅井に恋しなさい！

とよ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で浅井に恋しなさい！

【コード】

N9699X

【作者名】

とよ。

【あらすじ】

食中毒で死んだらしい俺はビリオンさん体型の自称神に真剣で私に恋しなさい！の世界に転生させられたらしい。まあ気軽に生きていこうやないか！

(この小説はある意味、作者の歴史知識披露の場？そして作者はまさかの原作未プレイ！というバカなクソガキが書いてる小説ですw)

ぶろろーく前編！やで。(前書き)

初投稿です。歴史好きな作者が書く関西弁な小説です！ご意見！
ご感想！待ってまゝです。

ぶるるーぐ前編！やで。

「んあー……」

目を覚ますと、ビリオンさんみたいな体型のオッサンがいた。

「誰がビ○ケンじゃ！」

唐突にビリオンさん体型のオッサン略してビリーさんが叫んだ。

「なんです？ビリーさん？」

「僕はビ○ケンでもビリーでも無いわ！僕は神じゃ！」

……ビリーさんはキレイやすい性格のようだ。そして頭が軽く逝ってるらしい。

「はあ……ほんで、その自称神さん事ビリーさんが俺に何の用なんです？」

「おぬし信じておらんのか……まあ良い。率直に言えばおぬしは死んだ。食中毒での。」

俺の死因どこぞの武天○師が飼っていた不死鳥と一緒にやん……

「そうなんか……俺、死んじゃったんか……」

「ありゃ？あつさり認めたのか。」

そりゃ自分の死因教えられたら、ねえ……

「早速で悪いんじゃないが何処か漫画やアニメの世界に転生してくれんか？」

「転生か〜！僕は何処の世界に行くんです？」

「おぬしの転生先はあみだくじで選ぶんじゃない！」

俺の聞き間違いか？

「はい……？あみだ？」

「うむ！あ・み・だ・く・じ・じ・ゃ」

（このブート○ヤンプ野郎殴って良い！？良いよね！？俺の人生どんだけどうでもええねん！？）

主人公がビリーズ○ートキャンプに対し明確な殺意を抱いた瞬間、であった。

ぶろろーく前編ーやで。(後書き)

今更感丸出しのブー○キャンプw

ぶろろーぐ後編！やで〜（前書き）

あみだくじ〜あみだくじ〜引いて楽しいあみだくじ〜

ぶるるーぐ後編！やで〜

「さああみだを選ぶのじゃ！」

まだ言ってるよ。ビリーさん・・・もつとまともな選び方無かったんかい！

まあしゃーないさかい選んだろやないか！

「んじゃ・・・これで」

「えーっと・・・おぬしの転生先は真剣で私に恋しなさい！の世界じゃな。」

・・・ん？何？アニメ？ゲーム？

「おい！ビリーさん！真剣で私に恋しなさい！って何やねん！」

「ビリーではないと言っておろうが！まったく・・・真剣で私に恋しなさい！とは武芸を嗜み尋常ではない強さを持つ女の子達に囲まれた武士娘恋愛アドベンチャーじゃ！」

「っーかビリーさんよー！あんたは俺をなんちゆう世界に放り込むつもりやねん！？」

「おぬしがあみだ引いて選んだんじゃろうが！願いを三つ叶えてやろう。早う考えい。」

このビリーさん、どこのポンガやねん・・・

「女の子が尋常じゃないほど強いんやろ？んじゃその世界で最強にしてくれ！ええか？」

「それはちよつと難しいのお。向こうの世界での最強の人物と同レベルまでなら良いぞ？」

「んゝゝゝわかった！それでええわ。二つ目の願いはイケメンにしてくれへん？出来る？」

「それぐらい容易い事じゃ！でもそんな事で良いのか？」

「前世モテへんかってんゝゝ振られては泣き、振られては泣き、その繰り返しやったんじゃゝゝ！」

「ゝゝゝ最後の願いはなんじゃ？」

おい！そこはスルーすんのかい！もうええわゝゝ

「頭良うしてくれ。高校時代のテストいつも赤点ギリギリやってん。」

自分で言うてて悲しなってきたわゝゝ

「うむ。わかった。では楽しい転生生活を。」

床が消えたゝゝそして落ちた！

「ぎゃああゝゝ！！！！ビリーさんのアホゝゝ！！！」

そこで俺は意識を失った。

ぶろろーく後編ーやでー(後書き)

ブリーさん・・・今後出演機会があるのだろうか・・・？

第一話「生まれ変わった」やで〜(前書き)

この前小谷城行ってきました！

浅井は良いですね〜！

ご意見、ご感想お願いします。

第一話「生まれ変わった」やで〜

浅井家

浅井家とは近江の国人であり、北近江の戦国大名である。

元来、浅井家は本性を藤原氏とする、京極家の譜代家臣であった。

しかしその京極家は浅井亮政が浅井家を継承した際に家督を争う御家騒動が発生。

その際、亮政は浅井郡の豪族、浅見貞則と共に当主高清の長男である高延を後継者に推し、高清と対立。亮政と貞則は高清とその次男高吉そして高吉を推す上坂光信を追放。

これ以降、京極家は国人一揆が主導する事になるが、高清を追放する際に共に戦った貞則が専横を極めたために亮政は貞則を追放、これ以降国人一揆の盟主となり京極家中の実権を握る事になる。

これが戦国大名浅井家の始まりである・・・

SIDE?

あれ？体が自由に動かん？

っーか体ちっさなっとなるやん!?

何やこれ！アカン！なんか色々な意味でアカンって！？

「おぎゃー！！？」

しかもしゃべれへんやん！？

「あらあら起きちゃったの？おしめ変えましょうね」

「ギヤ~~~~~！！！！」

俺の空しい叫びが部屋に響いた。

第一話「生まれ変わった」やで〜(後書き)

ヒロイン決まってるじゃない！ヤバいです。
次はちよつと更新遅くなるかもです。

第二話「カニの誘惑？」やで〜（前書き）

ご意見感想待ってます。

第二話「カニの誘惑？」やで〜

俺こと浅井政隆は転生者や。

おとんは戦国時代から続く浅井家の末裔らしい、浅井政綱。気の良
い親父や。

おとんが言うには浅井家は戦国時代、織田信長に攻められて滅亡し
ているらしいねん。でも当時の当主である浅井長政の継室お市の方
との子、万寿丸。そして側室との子、七郎って人が生き延び浅井家
は血筋を絶やさず現代の世に継承していったらしいわ。

ちなみに母とは俺が生まれてすぐに離婚したらしい、おしめ一回変
えてもろた事しか覚えてへんわ。まあ俺が赤ん坊の時分に俺が寝て
る横で修羅場が繰り広げられてたけどな・・・

まあそんな歴史ある家庭に生まれて早十年、今日は北陸・加賀に
いる、おとんの旧知の友人に会いに行くらしいねん。加賀言ったら
石川県やろ、ここ近江長浜から加賀かあ。地味に遠いなあ。

などと思っっている間に着いたらしい・・・福井に！

・・・いやなんでやねん！なんかおとんが「越前ガニ食いに行くし
福井に一泊してくぞ〜」とか言いだしやがった！

「いや！俺もカニ好きやけど！友人に会いに行くんとちゃうんかい
！俺もカニすきやけど！」というツツコミどころ満載なツツコミを
しっかり入れておいた。

でもあのクソ親父「あゝダイジヨブ、ダイジヨブ」。あの人優しいさかいに、許してくれるって、後で着くの明日になるって連絡入れとくし〜。」とか今日泊ってカニ食ってく気マンマンで言いやがった！

確かにカニ好きやけど！うん。好きやけど〜〜〜！とか考えてるうちに旅館に泊ってカニ食って福井を満喫してもうた・・・

次の日・・・

さあ加賀行くぞ〜！と意気込んでたらおとんが、「みやげ持っていないからちよつと待ってて〜」と俺に言ってきた。

まあ良いか、みやげ持って行くぐらいしなきゃ相手に失礼やんな・・・
・と思い「良いで。はよ買ってきてな。」と言ったのが運の尽きや
った。

・・・・・・帰って来ねえええ〜〜〜！！！！おい！もう夜
なつとるやないか〜！！

すると「あゝごめんごめん可愛い女の子につかまっても〜て・・・
とか言っておとんが帰ってきた。

「このポケ〜〜〜！！何がちよつと待ってて〜じゃ！もう夜
やないか！もう終電過ぎとんねん！」と言つとおとんのスルースキ
ルが発動された！

「今日は遅いしカニ食いに行こか！」

そしてまた今日も福井を満喫した主人公であった。

第二話「カニの誘惑？」やで〜（後書き）

福井と言えば朝倉家！浅井家と同盟を組んでたところですね。いま話題の某しゃべる犬父の実家が一乗谷ですがこの朝倉家の居城は一乗谷城なんですね〜！

次回オリキャラのプロフィールでも書きます！

ぶろふいーる紹介やで

随時更新あり(前書き)

?の部分は後々更新します。

ご意見感想お待ちしております。

ぶろふいーる紹介やで

随時更新あり

浅井政隆

身長 183センチ（高校生時）

血液型 O型

誕生日 9月1日

一人称 俺

あだ名 政隆 マサ

武器 日本刀「浅井一文字」

職業 ？

好きな食べ物 和食全般

好きな飲み物 日本茶

趣味 家に伝わる書物を読んだりする

特技 釣り（バス釣りなど川釣り）

大切なもの 友人や家族

苦手なもの ？

尊敬する人 浅井家歴代当主

近江長浜の出身者。

戦国時代の名家である浅井家の末裔であり次期当主である。

しかし本人は浅井家という家柄に捕らわれず誰にでも気さくに話しかける為友人が多く、家族を大切にしている。

基本めんどくさがりで、「めんどくさい事・だるい事・疲れる事」は基本しない主義であるらしい。

ちなみに目上の人にはしっかりと敬語を使う。

ぶろふいーる紹介やで

随時更新あり(後書き)

?の事は部分は後々更新します。

第三話「ともだちって、ええよね。」「やで〜(前書き)

初原作キャラ登場です。

ご意見感想よろしくお願いします！

第三話「ともだちって、ええよね〜。」「やで〜

加賀

加賀百万石と称され槍の又左と言われる豊臣五大老である、前田利家が治めた地である。

黛邸

「大ちゃん来たで〜。」

「おとん反対の家から人出てきてんけど・・・。」

「おっホンマや！大ちゃん久しぶり〜。」

出てきたのは気の優しそうな男の人と俺と同年か一つ下ぐらいの女の子だった。

「政綱本当に久しぶりだな。お前の子が生まれて以来か？」

「そやね〜。ほれ政隆、挨拶せえ。」

「お初にお目に掛かります。浅井政綱が子、浅井政隆でございます。以後お見知りおきを。」

「ははは。そう堅くならんで良いよ。私は黛大成。ゆっくりしていつてね。それじゃ由紀江、政隆君に御挨拶なさい。」

そう大成さんが言うとおどおどしながら可愛い女の子があわてて口

を開いた。

「あっあああのっ・・・まっまママ」

アカンフォローしたらな！

「落ち着いて〜。大丈夫やしな〜。」

あっ、ちよつと落ち着いてくれたかな・・・

「あっあの！黛由紀江です。よろしくお願いします！」

「由紀江ちゃんな。よろしく！俺は浅井政隆。好きなように呼んでな。」

「はい！じゃあ政隆さんとお呼びしてもよろしいでしょうか？」

「うん。良いで。じゃあ俺は由紀江って呼んでええ？」

「もちろん良いですよ！政隆さん！」

「やったぜ〜。まゆっち〜！いきなり名前で呼ぶ仲にまで進展してんじゃねーか！」

・・・ん！？なんや！？なんか聞こえたぞ！？

「オッス！オラ松風。まゆっちの友達だぞ〜。」

「えーつと松風ね。よろしく。」

由紀江は面白い芸当持ってんなあ・・・

「んじゃ俺と由紀江。そして松風は友達やな。」

「はっっ！」そう言って由紀江は固まった。

「あれどうしたんだ由紀江？由紀江さくん？」

すると由紀江は「初めてのお友達です！やりましたよ松風！」

「おうまゆっち！オラも友達ができて嬉しいぜ〜！」

なんか終止喜んでた・・・

ちなみに後で松風について聞いてみたら松風は九十九神がストラップに憑依した存在らしい、神といえばビリー元気にしとるかな〜・・・

第三話「ともだちって、ええよね〜。」「さび〜」(後書き)

松風書くの難しいです。

第四話「えーだるいって疲れるやん、しかも怖いし……」「やで」（前書き）

今回はまゆっちも出てこない……

ご意見ご感想をお待ちします。

第四話「えーだるいって疲れるやん、しかも怖いし・・・」やで〜

おはこんばんちわ、俺だ。

突然だが、皆さんは父の友人がめっちゃヤバい人ならどう対応する？

俺の場合・・・・・・・・・・・・・・・・逃げる！！

いやだつてさ！おとんの友達の黛さんはね、国から帯刀を許可されてんねんで！

もうなんというかあかんやろ！だつて刀やで！

K A T A N A

刀言つたらあれやん日本刀やん！日本刀で言うたらもう・・・

逃げるって言うたけどわかるやろ！ホンママアカンねんって！

まあここまで言うて何やけど最終的に逃げ切れず捕まった。

っーかおとんこんなに足、速かったんや・・・

というわけで簡単に言えば、剣聖こと黛大成さんに修行付けてもらってま〜す・・・

おとんは「大ちゃん、政隆逃げるかもしれんしみっちり修行してあげてね。あ！あとボク仕事あるし帰るわ。また迎えに来るし。政隆、頑張れよ。」とだけ言い残し近江長浜に帰りやがった。

あんのクソ親父~~~~~!!!!!!

第四話「えーだるいって疲れるやん、しかも怖いし・・・」やで〜（後書き）

戦国時代の日本刀の達人と言えば新陰流の上泉信綱先生。新当流の塚原卜伝先生。中条流の富田勢源先生。一刀流の伊藤一刀斎先生。吉岡流の吉岡憲法先生。一羽流の諸岡一羽先生。柳生新陰流の柳生宗厳先生などが特に有名ですね。

ぶろふいーる紹介やで (オリキャラ編) (前書き)

今回は主人公の父である浅井政綱さんのプロフィールです。
ご意見感想お待ちしております。

ぶろふいーる紹介やで〜
(オリキャラ編)

浅井政綱

身長 187センチ

血液型 O型

誕生日 8月27日

一人称 ボク

あだ名 おとん 政綱

武器 色々

職業 なんと!色々

好きな食べ物 やっぱ、色々

好きな飲み物 なんだかんだと、色々

趣味 旅先での食べ歩き

特技 料理(和洋中すべて作れるらしい)

大切なもの 友人や家族

苦手なもの 離婚した妻

尊敬する人 浅井家歴代当主

主人公である、浅井政隆の父。

浅井家の現当主である。

いつも息子政隆を振り回している。

ちなみに政隆のめんどくさがりな性格は政綱の影響である。

ぶろふいーる紹介やで
(オリキャラ編)
(後書き)

ご意見感想お待ちしております

第五話「まゆっちとブートー!?」やぶ〜(前書き)

ご意見感想お待ちしております。
やっぱり松風って難しい。

第五話「まゆっちとデート!?!」やで〜

おとんが帰ってから、三日が経った。

「政綱のやつが君を一月ほど預かってほしいらしいんだよ。」

「……ん? って事はまだ修行の日々が待ち受けてるってわけ？」

「ウソだと言って! ウソだと言ってよ〜! ?」

この一連の流れがあつて、黨家の居候になつた俺やつた。

まあその事を話した時の由紀江は……

うん、後で聞いた話だが凄くよろこんでたらしい、そついや初めての友達つて言つてたしな〜。

ちなみに今、俺と由紀江は一緒に蕎麦屋に来ている。

由紀江がすんごい遠慮がちに「一緒にどこか行きませんか?」つて誘ってきたさかいにまあ別に断る理由が無いしご飯食べに行くことになつた。

ちよつと前大成さんが由紀江は蕎麦が好きつて言つとつたし

「じゃあ俺のおごりで蕎麦食べに行こか〜」つて言つたら、

由紀江が「政隆さんにおごつてもらつな〜!」つて慌ててたけど

俺が「気にせんといて〜や、たまには男らしいとこ由紀江に見せた
いじゃん。」

って言ったら、顔が赤くなって俯いてもった。

俺なんかした？

まあそんな事があって蕎麦屋に来たというわけだ。

俺と由紀江はざる蕎麦を注文した。

由紀江と話しているうちに蕎麦が運ばれてきた。

由紀江は上品に食べるな〜。

由紀江が食べてる姿を眺めると、

「まさっちは食べねえのか？それともまゆっちに見とれてたのか？
って松風に言われてもったわ。」

「うん、あ〜、食べるで。いや、ね由紀江が蕎麦を上品に食べてる
なあって思ってたらホンマに見とれてもったぞ。」

「まゆっち！まさっちはまゆっちに脈ありなんじゃねえのか!？」

「あっあっあっ／＼／／」

なぜまた赤くなる？

そんなこんなで一緒に蕎麦を食べ終えて、締め蕎麦湯を飲んでから家に帰った。

帰りに大成さんと奥さんそして沙也佳ちゃんのお土産にお団子を買って帰ったらめっちゃ喜ばれた。

楽しい一日やったな。明日からも修行頑張るぞ！

・・・ホンマは頑張りたくなく無いけどな。

第五話「まゆっちとブリーター…?」「やで〜」(後書き)

「意見」感想お待ちしております。

第六話「飯が旨いと、良いけれど、不味けりゃ生きて行けないとおもっねん」
ご意見、感想お待ちしております。

第六話「飯が旨いと、良いけれど、不味けりゃ生きて行けないとおもっねん」

おはよう、こんにちわ、こんばんわ、俺だ。

今日はやっぱり修行をしている。

「やあっ!」

「踏み込みが甘いぞ、政隆君。」

もうこれなんなの!?!泣きそう・・・

ていうかさ、大成さん、なんか知らんけど、修行の時にになると、人が変わるといっつか・・・

表情とかは普段と変わらず優しいねんけどなんていうの?気迫って
いっつか?もう駄目・・・

「政隆君、今日はここまでにしておこうか。」

「はい!ありがとうございます!」

ああやっと終わった、ホンマアカンでこれ。竹刀で人が殺せそうな
強さなんやねんな。

俺、一応ベリーに強くしてもらったはずなんやけど・・・

まあ良いや。

修行終わったしひとつ風呂浴びて、たらふく食うぞー！

今日の味噌汁は由紀江が作ったらしい。

「由紀江、今日の味噌汁も美味しいで。良い嫁さんになれるんちゃう？」

「はうっ／＼／」

また赤くなつた。ちよつと前からこんな感じなんやねんぞ。風邪かな？

「政隆君、政綱から電話があつてね、「明日迎えに行くから待ってね」だつて。」

「わかりました。」

あれ由紀江の表情が少し暗くなつた、ありゃあ、やっぱり俺が帰ると友達が松風だけになつちゃうからかな？と、言つても松風は・・・

「由紀江、んじゃまた帰つてからも修行しに遊びに行くし寂しなつたら家に電話してな。」

「おう、まさつち、また来てくれよな。」

「はい！是非遊びに来てください！」

これで長浜に帰つてからもたまたまに黛邸に修行しに来なきゃ行けなくなつた俺であつた。

第六話「飯が旨いと、良いけれど、不味けりゃ生きて行けないとおもっねん」
松風難しいです。

この頃後書きに松風難しいとめっちゃくちや書いてる気がしますw

第七話「刀？えっ！今は帯刀禁止の世の中やで！？」やで〜（前書き）

「ご意見」「感想お待ちしております。」

第七話「刀？えっ！今は帯刀禁止の世の中やで！？」やで〜

帰ってきました長浜〜。

黛郎から長浜に帰る途中にやっぱりといつかなんとといつかおとんが
帰りに

「小浜でぶぐ食べに行くぞ〜。ほんでついでにお前の好きな釣りも
行こか〜！」

はいっ！この流れね！

行きしなにも「カニ食べに行くぞ〜。」とか言ってたやん！ていう
かホンマにおとんの暴走を止められる技を覚えたい・・・

「政隆〜、由紀江ちゃんと仲良さそうやったやん〜。どしたん？何
かあったん？」

「別に？由紀江の家に今度遊びに行く約束しただけやで。それよ
りおとん・・・なんで毎回どっか用事行くたびになんか旨いもん食
って目的地に辿り着くのに予定の三〜四倍掛かんの？」

「そりゃ〜、どうせどっか行くんやったら旨いもん食べて楽しまな
アカンでしょ？」

そのせいで俺はいつも目的地に着くころには、へばっとなるけどな！

でもまあ一応無事に、帰ってこれたし良かった良かった。

帰って来たは良いものの、久しぶり過ぎてなんか家が懐かしく感じるわ。

「政隆〜！」おとんが呼んでる。

「そんじゃ黛での修行も終えたんやし刀をあげよう！」

刀！？何それ聞いてない！？

「大ちゃんから聞いたで〜、修行頑張ったんやね〜。だから家に伝えるこの刀をあげるわ〜。」

「ありがとう、おとん。刀の名前はなんて言うん？」

「浅井一文字やで、浅井長政公愛用の刀やったらしい。焼失したと思っただらしいねんけど家の倉整理してたら出てきたんだって。」

「なんか凄い刀なんやね〜。その前に倉に置いとくんやったら置いたって事ぐらいちゃんと覚えとかんかい・・・」

「いや〜結構前からみんな置いてあった事忘れてたみたいやで。たしか大正の時代ぐらいから所在不明やったらしいし・・・」

「・・・」

「・・・」

「ま、まあ大事に使うわ。ありがとうおとん。」

「うん、家宝やねんから大事に使いや。」

こうして浅井一文字という名の愛刀を手に入れた俺やった。

第七話「刀？えっ！今は帯刀禁止の世の中やで！？」やで〜（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

第八話「川神の鉄爺さんは化け物か!?!」やで〜(前書き)

PV21974アクセス、ユニークアクセス5472人らしいです。
こんな小説と言えるのかわからない小説を凄い人数の方が見てく
れるんですね!

ご意見感想お待ちしております。

第八話「川神の鉄爺さんは化け物か!?」やで〜

スラムツパギ、スラムツシアン、スラムツマラム、俺だ。

加賀から帰って来て早1か月経つ。

そついやおとんがちょっと前「川神に行かな・・・」とか「鉄爺さんとルーちゃんに・・・」とかぶつぶつ独り言言つとつたなあ、川神って何処や？

「政隆〜！川神行くぞ〜！鉄爺さんとルーちゃんに会いに〜！」

いや、え〜〜〜！（安〇さん風）ダルい！疲れる！めんどくさい！あかん、またおとんの事や・・・絶対行きしなにまたどっか行きたいとか言いだしおる！

それだけは・・・それだけは！勘弁して下さい！

まあ俺が渋ってるうちにいつの間にか電車に乗せられてた・・・

「あれ？おとん、川神行くまでどっか寄らへんの？」

「うん、今回は鉄爺さんに会いに行くし、鉄爺さんを怒らせたらしたらヤバいし、まあそんなことで怒らないと思うけど念には念をってね。」

なんやと・・・！あのおとんが素直に目的に直行！？あり得ない！旅行や挨拶回り、ほんで買物とかおとんと一緒にどっか行く時は絶対にどっか寄り道するのに！

加賀の時はカニ！帰りはふぐ！なのに何故川神に行く途中には何処にも寄らない！？

どんだけ恐ろしいんや！その鉄爺さんっちゅう人は！川神の鉄爺さんは化け物か！？

「次は〜川神〜 川神〜」

「なんやと！ホンマにおとんが寄り道せず目的地に着いてしまった・・・」

「はぁー、着いたな〜。政隆。じゃあ鉄爺さんとルーちゃんに会いに行こうか！」

おとんテンション上がってるけど俺は川神の鉄爺さんに会って考えただけで恐ろしい。あのおとんが恐れる位の人や、警戒を怠らない様にしよう・・・

第八話「川神の鉄爺さんは化け物か!?!」やで〜(後書き)

ご意見感想お待ちしております。

第九話「恋のマサタカ伝説!？」やで〜(前書き)

ご意見感想お待ちしております。

第九話「恋のマサタカ伝説!?!」やで〜

川神院

関東三山の一つ、厄除けの寺院として名高く市の名前になるほどの場らしい。

「遠い所から御苦労様。ゆっくりしていくんじゃよ。」

・・・あれ?これが鉄爺さん?優しそうなおじいさんやん・・・

確かに初め見た時に「仮装ですか?」っていう格好してたけど(女装ですか?とは思わんかったで・・・)そんなにおとんが恐ろしがる程の人やと思えんねんけど・・・

「鉄爺さん、久しぶりです〜。お孫さんお元気ですか?」

「うむ、凄く元気じゃぞ、元気すぎて困るぐらいに・・・。してその子は?」

「おお!紹介するの忘れてました!政隆挨拶せえ」

!?!川神院とかおとんとか関係ない!?!いきなり挨拶せえって振られ少し困るよ!おとんもいつの日か私を見捨てる!?!そんなの嫌だ!?!人生続けたい!?!

長生きした〜い!!!

「……というのは置いて」お初にお目に掛かります。浅井政綱が子、浅井政隆と申します。以後お見知りおきを。」

「うむ、宜しくの、政隆くん。儂は川神鉄心。ここ川神院の代表じや。」

「して鉄爺さんルーちゃんは何処にいるんです？」

「ルーは今一子の修行の相手をしておる。」

「そうですね。ではまた後ほど会いに来ます。政隆お前は川神初めてやる、せやしどっか遊びに行つてこい」

俺ここの土地勘一つも無いんやけど……まあええか。

「そんじゃ遊びに行つてきます、鉄心さん、おとんを頼みますね。」

「わかった、政綱をしっかりと見ておくからいつてらっしゃい。」

いい人やな、鉄心さん。んじゃどっか行こか！！

1時間後

「アカン！迷つた〜!？」

第九話「恋のマサタカ伝説!？」やで〜(後書き)

ご意見感想お待ちしております。

W
A
W
A
○
A

第十話「迷子っ!?!?な・・・な なんの話ですっ!?!?」やぶ〜(前書き)

「意見感想お待ちしております。」

第十話「迷子っ!?!な・・・な、なんの話ですっ!?!」やん

絶賛迷子中、俺だ。

「マシユマロ食べる?」

急に女の子がマシユマロ食べるか聞いてきた。ちよつどええわ、川神院への道を聞こう!

「マシユマロおおきに、もろっで。」

「っ!?!うん!マシユマロもっど食べる?」

「何個ももろてええの?君の分無くなんで?」

「うん・・・でもあげる!?!」

「この子が食べれんのはかわいそうやし、一緒に食つか?」

「ほなら一緒に食べよか?みんなで食べる方が上手いで?」

「うんっ!いつしよに食べよう!」

なんでこんなに喜んでんのやろか?

「なあ君の名前は?」

「僕?僕は小雪!」

「小雪か、ええ名前だな。俺は浅井政隆って言うねんよろしくな、小雪！」

「ありがとう！またいつしよにマシユマロ食べようね！」

「そやねじゃあ俺らは友達やー！」

「友達！？ほんとに!?!」

「そや、友達やで、小雪。」

「……うわーん!!ありがとうっ、まさたかー!!!!」

「うおっ!どした?小雪!?!」

そんな急に抱きついて来んなや!?!びっくりするやんけ!!

「ーか反応由紀江とよう似とんな?初めての友達パターンちょっと多ない?まあ今は小雪を落ち着かせなきや。」

「大丈夫か、小雪。なんかつらい事でもあったんか?俺はしばらく川神院に居るからまた遊びにきいや?」

「うん!!遊びに行くねっ!!」

「もう遅いし帰らなアカンな、じゃあまたな。」

「うん!またね!」

・・・あーっ！小雪に川神院までの道聞くん忘れてたー！！！！

二時間後川神院の修行僧の方が俺を探し出してくれた、ありがとう
！修行僧様！！

第十話「迷子っ!?!?な・・・な なんの話ですっ!?!?」やん(後書き)

「意見感想お待ちしております。」

第十一話「川神院って城見たくっつい」やで〜(前書き)

「ご意見」「感想お待ちしております。」

第十一話「川神院って城見たくっつい」やで

俺は修行僧様と共に川神院に帰っていた。

「修行僧様、わざわざ申し訳ありません。」

修行僧様は「？」的な顔をしていた・・・

まあ何はともあれ帰ってこれたわ。

「お前が浅井政隆か？」

「・・・えつとどちらさん？ストーカー？なに、新手の修行僧様狙いの少女なん？今夜の君はアニマル？フ・シ・ダ・ラ・ミ・ダ・ラ」

「誰がフシダラだっ!？」

ゴウツ!!

バシツ!!

「ん？なんで急に殴ってくるの？危ないやろ。俺おこっちやうよ？それともなに？そういう趣味なん？いやあ最近の子は怖いね。でもあいにく俺はソツチ系じゃ無いんだよね。」

「私の攻撃を受け止めた？なかなかやるな！お前！」

「えっ!？ソツチ系発言スルーかい!？君なかなかおもしろいな！名

前は？」

「私は川神百代！それより政隆！私と死合おう！」

「やだ。」

「っ！？何故だ！？」

「めんどくさいさかいに嫌。」

「めんどくさいだと！？」

「うん。めんどくさい事したない。」

「ん〜・・・」

「おーい、百代〜！政隆君〜！もう夜遅いんだから続きは明日にして早く寝るんだヨー！」

「えつとあなたは？」

「おい！ルー！私の邪魔をするな！」

「ワタシはルー・イーと言つネ、百代、死合いたいののはわかるけど今は我慢するヨ。」

「そうじゃよ、百代。死合つにしてももう遅い明日にしない。」

「じじい〜」

「あゝ鉄心さん。おとんは？」

「政綱は帰ったよ、政隆君を預かってほしいと言っておったわ。」

「わかりました〜っ！んじゃ明日からよろしくおねがいします〜、
百代……さん？にルーさん。」

こうして川神院での居候生活が始まった。

第十一話「川神院って城見たくっつい」やで〜（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

W A W O W A

第十二話「新しい友達!？」やで〜(前書き)

「ご意見」「感想お待ちしております。」

第十二話「新しい友達!？」やで

おはよ「私と戦え!」う、こんに「聞いているのか!」「ちは、こんに
おい!政隆」ばんは。俺だ。

見たとおり今、百代さんに決闘を申し込まれてる。こっちらから
迷惑以外の何もんでも無い・・・

「百代さん・・・嫌です・・・決闘なんか、めんどくさいんです、
だるいんです、疲れるんです。」

「早く死合おう!」

「あーわすれてたーそういえば今日用事があったんだー。っとい
うわけで失礼します!」

「あっおい!」

「私が追いつけ無いたと・・・面白い、浅井政隆・・・」

・・・逃げたは良いものの寒気がする・・・

「あっ!まさたか!!!」

「どしたん小雪?ほんでなんで川神院の前に居るん?」

「まさたかのもとに遊びに来たんだよ!」

「おゝ、じゃあ遊びに行こか？何処行く？」

「んゝ・・・じゃあ僕はまさたかに任せる！」

任せられても困んねんけど・・・

「じゃあそこらへんぶらつくか？」

「うん！」

しばらく歩いて小雪がちょっと疲れたっぽいから駄菓子屋に寄る事になった。

「小雪は何買っ？」

「僕はマシユマロ！」

「わかった、んじゃ俺が奢ったる。はよ選び。」

小雪がマシユマロを選んでる途中、男の子二人（イケメンと後々ハゲそう？いやそりゃないか今フツサフサやし・・・）に声掛けられた。

「おい！お前いま俺の事、後々ハゲそうって思ったよなあ！！」

「準、初対面の人に失礼ですよ、すみません・・・えっと？」

「ああ俺は浅井政隆や、よろしく。」

「はじめまして、政隆君、私は葵冬馬。こちらは・・・」

「井上準だ。よろしくな。それより俺がハゲそうってどういことだよ！」

「そつ、そんな事思っへんで。なんか二人イケメンやる？せやか
らモテるんやるな〜って……」

「それより政隆君、彼女がお待ちですよ？」

「おわっ！忘れてた！あと彼女ちゃうしな！……おい小雪〜っ、
選んだか〜？」

「うん！まさたか、この人達だね？」

「あ〜、冬馬、準、この子の名前は小雪。仲良うしたってや？」

「こんにちわ、小雪さん、私の名前は葵冬馬と申します。」

「ユキで良いよ〜。」

「小雪〜、俺もユキって呼んでええ？」

「まさたかはだめ〜。僕はまさたかには名前で呼んでほしいんだよ
！」

「う〜ん……オツケーわかった。」

「俺ずつとスルーされてる……」

「準、戻って来てください。」

「あゝ、わかったよ、若。俺は井上準よろしく。ユキ。」

「うん！よろしくね。準！」

「じゃあ俺ら4人は友達な？良い？」

「っ！良いんですか？政隆君！？僕の父は悪事を働いたんですよ！？」

「そんなお前のおとんの話やる？関係無いやん？なんか問題あるん？」

「っでも！！」

「親は親、子は子。そんなん気にしてたら幸せ逃げてくで。」

「……ありがとうございます。政隆君。よろしくお願いしますね？」

「若がそう言うんなら……よろしくな、政隆、ユキ。」

「うん！冬馬！準！またいつしよに遊ぼうね！」

「俺は今、川神院で世話なってる。暇になったら遊びに来いよ？」

「わかりました。準と一緒に遊びに行きますね？」

「おう俺も若とユキと三人で遊びに行くからな？」

「んじゃ待っとくわ！」

こうして川神での友達が三人に増えた！！

第十二話「新しい友達!?!」やで〜(後書き)

「ご意見」「感想お待ちしております。」

第十三話「実家？ああこの頃挨拶廻りで帰って入んなあ」「やで〜」(前書き)

ご意見、感想お待ちしております。

第十三話「実家？ああこの頃挨拶廻りで帰って入んなあ」「やあ〜

今、俺は小雪と、冬馬と、準と遊んでいる。

俺の実家で・・・

あつるえ〜〜？なんで実家〜〜？

時はさかのぼること、3日前である。

「小雪〜、おはよ〜つと、冬馬と準は？」

「冬馬と準はまだ来てないよ〜、それよりまさたか〜マシユマロ食
へる〜？」

「この子はいつつ俺にマシユマロくれる。ホンマにええ子やなあ・・・

「おっ！おおきに。飴ちゃんやるわ。」

「うん！ありがと〜！」

「お待たせしてすみません。」

「スマン！待ったか〜？」

「準めっちゃ待ったで。・・・あつ冬馬は待ってないしな〜。」

「つてオイッ！！なんで俺だけなんだよ！なんで若だけ待ってないんだよッ！？」

「まあまあ文句言つなや。冗談やて。んじゃ今日は何して遊ぶ？とりあえず駄菓子屋行く？それとも川神院に行く？」

「僕、まさたかが住んでるところ見たくい。」

「んじゃ川神院行こか。冬馬と準もそれでええ？」

「私もそれで良いですよ。準は？」

「俺も若が良いんならなんでも良いぜ。」

「よし！決まりやな。んじゃ行こか！」

川神院

「鉄心さん、ただいま戻りました。」

「おおちようどよい。今さっき政綱から電話が掛かってきてのあと5分後に川神院に着くから待ってて欲しいそうじゃよ。」

「ええー！！俺今から友達と遊ぶ予定なんですけど！」

「おーい政隆！迎えに来たで。」

「早っ！ていうか珍しく車！」

「ん？政隆、この子等だれ？」

「えっとこのぼわっとした雰囲気の子が小雪」

「うえーい、よろしくね〜。」

「ほんでこのイケメンが冬馬。」

「よろしくお願ひします、政隆君のお父さん」

「最後に後々ハ・・・ゲフンゲフン、えっとこいつが準」

「今、ハゲって言いかけたよなッ！！・・・えっと政隆の親父が、よろしく。」

「はい、みんなよろしくね。急で悪いんやけど政隆今から長浜の家に帰らなきゃいけないんやね。んでみんなには悪いねんけど政隆貰ってつてええ？」

「えー、僕はまさたかと離れたくないよ〜。」

「いらいら、ユキ、わがまま言っちゃいけません。」

「準のハゲ！」

「ハゲてねえよ！！！」

「しゃーない、小雪ちゃんと冬馬君と準君やね。君らが嫌じゃなきゃ長浜一緒に行く？」

「うんっ！良いの？」

「本当に良いんですか？政隆君のお父さん。」

「良いのか？政隆の親父？」

「あー良いよ良いよ、あ！ボクの名前は政綱やで。よろしく」

というわけでこの状況に至るわけだ・・・

余談だがおとんは帰り道寄り道しまくって帰るまで3日掛かったのは言っまでもない・・・

第十三話「実家？ああこの頃挨拶廻りで帰って入んなあ」「やで〜」(後書き)

ご意見、感想お待ちしております。

第十四話「カラオケ？何だろ・・・戦闘機にのりながら歌を歌ってる男が頭に浮

き意見、感想お待ちしております。

第十四話「カラオケ？何だろ・・・戦闘機にのりながら歌を歌ってる男が頭に浮

浅井邸にて。

「ねえー、冬馬、準。まさたかどこ行っちゃったの？」

「ユキ、政隆がさっき、友達が近くに来てるらしいから、連れてくるっていったじゃねえか。」

「ぶー！」

「なんでオレに当たるんだよ！つかすぐ帰ってくるだろ？」

「うーん・・・」

「そうですね、ユキ、政隆君はすぐ帰ってくるって言ってましたし。」

「・・・わかった。」

「おーい今帰りましたよっ、ただいま。」

「あっ！まさたかだ！まさたかっ！！」

「おっ！小雪良い子にしてたか？」

「うんー！」

「・・・準、いつもすまん、小雪駄々こねんかった？」

「あー、別に気にしてないから。それでお前の友達は？」

「あれ？さっきまでそこに居たのに・・・」

「ウェイイ。マシユマロ食べる？」

「あっあっあっ」

「隠れてんと出てこいよ、由紀江。」

「あっあの！政隆さん！この方達は？」

「あー紹介するわ、みんな、挨拶したって」

「ウェイイ！僕小雪だよー！」

「私は葵冬馬と言います、よろしくお願ひします。」

「ああ、俺は井上準、よろしくな。」

「えっと、えっと。」

「由紀江、落ち着けよ。」

「はっはい！あの、まっ黛由紀江と申します！よろしくおねがひしますー！」

「はい、よろしくお願ひしますね。黛さん。」

「へーイ、葵っち、そんな堅苦しい呼び方じゃなくてまゆっちって呼んでくれよ。」

「由紀江、初対面の人に松風をちゃんと紹介せなアカンやろ？」

「あつ！忘れてました！松風、ご挨拶を。」

「イエーイ、オラ松風。まゆっちの友達だぞ。」

「えっと・・・よろしくな、まゆ・・・っち？と松風・・・？」

「よろしくね！まゆっち！松風！」

「よろしくお願いしますね。まゆっちさんと松風さん。」

「はいっ！！」

「んじゃ何して遊ぶ？うちにあるもん言ったらカラオケとかあるけど？普通にゲーム？」

「カラオケしよ！」

「つーか政隆ん家なんでカラオケあるんだよッ？」

「いや、おとんがカラオケ行くんめんどいからって買いおった」

「・・・お前もそうだけど、お前の親父もなんか凄いよ・・・」

「ん？そうか？由紀江、なんか歌ってみてよ。」

「はづっ！わっ私ごときがそんな！」

「ええやん、ええやん。んじゃこれとかどつ？」

「えっ！あの！すつなお〜に好き〜とっ言える私っも〜・・・」

「上手いな！由紀江！もっかい歌って〜や。」

「まゆっち上手いね〜」

「あっあの・・・」

「チャンスだぜ〜、まゆっち〜。まさっちが上手いって言うてくれるんだ！がんばって歌え〜」

「そうですね！松風！私、頑張ります！」

「でもオラも歌ってみてえよまゆっち〜！」

「じゃあ、松風歌ってみてください！〜」

「オラ頑張るぜ〜！」

「ねえまさたか〜、僕おなかすいた〜。」

「もうそんな時間か・・・んじゃ今日はしまいにしよか？由紀江〜みんなで一緒に〜ご飯食べるぞ〜。そろそろカラオケやめや〜。」

「はっはい！」

「オラ、歌えなかったぜ・・・」

カラオケで由紀江が楽しそうにしてたし、みんなと仲良くなれたみたい。

良かった良かった！

第十四話「カラオケ？何だろ・・・戦闘機にのりながら歌を歌ってる男が頭に浮

き意見、感想お待ちしております。

第十五話「マシユマロって日本では加熱せず食べ外国では加熱して食べるらしい

」意見感想お待ちしております。

第十五話「マシユマロって日本では加熱せず食べ外国では加熱して食べるらしい

甘いものはまあまあ好き俺だ。

今、俺達はおとんの帰りを皆で待っている。

「あの、まゆっちゃん。」

「なんででしょうか、葵さん？」

「へーい、葵っちゃん。さんはいらねえぜ、さんは。」

葵っちゃんって結構言にくいな・・・

「はい、松風わかりました。ではまゆっちゃん、その松風とは何者なんですか？」

「ああ、オレも気になる、教えてくれ、まゆず・・・じゃなくてまゆっちゃん。」

「あっ！松風はですね、父が作ってくれた木彫りのストラップです
！！」

「ほーう、そうなんか。大成さん凄いな。ちなみに名前の由来は前田利益公の愛馬から来てんの？」

「はっ、はい！そうですよ！色が黒いので。」

「そうなんか！俺やったら三国黒とか百段かな、あっ！でも近江

黒とかも良いかも!!」

「なに言ってるつか全然わかんねえ。若わかるか？」

「多分ですけど歴史的に有名な馬の名前とかじゃないでしょうか？」

「ウエーイ！僕も馬欲しい！」

「馬飼うとかシャレにならないほど金が掛かるんだぜ。無理、無理。」

「えー！ブーブー。」

「あ！あの！話は戻りますが、それですね、松風は九十九神なんです！」

「ねえ準、九十九神ってなに？」

「オレに聞かれてもわかんねえよツ！若はわかるか？」

「九十九神とは古くなった道具などに付く神だったと。でも松風は由紀江さんが生まれてから作ったものなら、そんなに長い年月経ってませんね。」

「多分、アレちゃう？思いが強いから、的なの？というか九十九神より九十九髪茄子の方が興味ある、朝倉宗滴公の持ってた茶器から松永弾正までの・・・」

「多分、そうだと思います。いつもありがとうございます。松風。」

「おう！まゆっちもありがとよ！」

「ねえまさたか、どうしたの？」

「ユキ、政隆は今、自分の世界に入り込んでる。邪魔しちや駄目だぜ？」

「政隆君は歴史が得意なんです。ユキも一緒に歴史勉強しますか？」

「うんっ！僕も一緒にまさたかと勉強する！」

「ただいま。あれ？また政隆、歴史モード入ったん？まあいつか、んじゃご飯作るから待っててね。」

「あっ！あの私も手伝って宜しいでしょうか？」

「おっ！ありがとう、由紀江ちゃん。んじゃ野菜刻んで？」

「はいっ！」

それから30分後

「みんな、出来たよ。」

「ウエイ！マシユマロ入れる。」

「……」

マシユマロ鍋の、完成である。

「じしめじしめ」

「ウエイ
」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

第十五話「マシユマロって日本では加熱せず食べ外国では加熱して食べるらしい

」意見感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9699x/>

真剣で浅井に恋しなさい！

2011年11月21日08時11分発行